

小谷 教子

（麻布学園・非）

【目的】 「長期化する親への依存」は、先進諸国の若者に見られる共通現象である。日本の高等教育においては、学生は親への経済的依存により学生生活を送ることが出来る特徴を持っている。そのことが自立を遅らせる主要な要因となっている。そこで本研究は、教育費負担が少なく卒業後の職業への参入が明確な専門学校生を取り上げて成人期への移行過程を分析し、高等教育の費用負担はじめ教育システムの違いが自立を促進していることを明らかにする。

【方法】 研究名称：青年の自立と家族意識に関する調査研究（千葉大学犬塚先、宮本みち子ら） 調査期間：1998年7月～10月、自記式質問紙法による調査を実施。対象者：専門学校生124名、大学生466名、米アラバマ大生182名。調査項目：経済的依存、意識、大人指標、家庭内ルール、家庭内役割、親子関係絆、行動等。専門学校生・大学生のデータを用いて集計分析をおこなった。

【分析結果】 専門学校生は、①奨学金、授業料、学生寮などの教育費をとりまく制度により親への経済的依存度が少なく親からの独立移行が可能であること。②専門的職業教育を受けることにより資格を取得でき職業上の移行が可能であること。③大人指標の重要要件である労働市場への参入が高率で保障されていること、さらに④自立規範も大学生に比べ高く、成人期移行への標準的パターンが確立しているといえる。